

第1章 教育の常識を覆す！なぜ今「非認知能力」なのか

1.1 2040年を生きる子どもたちへの挑戦状

(1) AI・テクノロジーが社会を生きる子どもたちへの挑戦状

① 社会はかつてないスピードで変化している

AI、ロボット工学、バイオテクノロジー、量子コンピューティング…現代の技術革新はかつてないスピードで進み、私たちの生活や価値観を劇的に変えています。これまでの教育で重視されてきた「正解のある知識」は、もはやインターネットですぐに手に入る時代になり、知識だけでは未来を生き抜く力とはなりません。

2040年代、今の子どもたちが大人になる頃には、多くの職業が自動化され、AIやロボットが仕事を担う社会が訪れます。さらに気候変動や人口構造の変化など、予測不能な課題が山積するでしょう。そのような社会に必要なのは、単なる知識ではなく、自ら課題を見つけ、解決する力、柔軟に適応する力、困難に立ち向かうレジリエンスです。

教育者に問われているのは、知識を伝えるだけの役割を超え、子どもたちが未来に立ち向かえる力を育む伴走者としての責任です。教育の目的を再定義し、子どもたちが主体的に生き抜くための「生き抜く力」を育むことが、今まさに求められています。

◎問いかけ ～ 私たちは、子どもたちに何を残してあげるべきでしょうか？
教科書の知識だけでしょうか？
それとも、どんな時代にも通用する「生き抜く力」でしょうか？

② 教育の歴史と現状の限界

日本の教育は長らく、知識の習得とテストによる評価を中心に構築されてきました。戦後の復興期においては、国民全体の底上げを図る有効な手段でした。しかし、社会が複雑化し、多様な価値観や創造性が求められる現代では、従来型教育の限界が顕在化しています。

◎現在の状況 ～ 子どもたちは与えられた課題を解くことは得意
しかし、自ら課題を見つけ、解決する力を育む機会は不足

◎課題 ～ 過去の成功体験に縛られた教育では、未来社会に適応できる力を十分に育成することが困難
子どもたちが「自分の力で世界を変えられる」という自己肯定感や挑戦力を得る場が不足

③ 未来に向けた教育改革の必要性

私たちは今、教育の歴史上、かつてない転換期に立たされています。AIやロボット、バイオテクノロジーの急速な進展によって、これまでの知識偏重型の教育では、子ど

もたちが未来の社会で生き抜く力を十分に身につけることが困難になっています。もし、今この瞬間に教育のあり方を見直し、改革の舵を切らなければ、日本の教育は世界の変化に取り残され、弱体化してしまう危険性があります。

教育の目的を再定義し、単なる知識の伝達にとどまらず、子どもたちが自ら課題を発見し、解決する力、柔軟に適應する力、困難に立ち向かう力を育むこと、それこそが今、最も緊急に求められる課題です。

言い換えれば、私たちが今行動しなければ、次世代の子どもたちは予測不能な社会に対して不十分な準備しかできず、競争力や生き抜く力を失うことになります。教育改革はもはや選択ではなく、日本の未来を左右する責任ある行動なのです。

ア 子ども中心の主体的学びの実現

未来社会では、単に知識を覚えるだけでは対応できません。子どもたち自身が課題を発見し、考え、行動する主体的学びを基盤にすることが最優先です。主体的に学ぶ力は、挑戦力・創造力・自己効力感などの非認知能力を育む源であり、予測不能な未来に立ち向かう力そのものです。教育者は、単なる知識の提供者ではなく、子どもたちの学びを共に設計する伴走者・ファシリテーターとして関わることが求められています。

キーワード：主体性、挑戦力、創造力、自己効力感、伴走型教育

イ 非認知能力と未来型スキルの育成

これからの教育は、知識だけでなく、環境変化や困難に柔軟に対応できるレジリエンス、チームで協働し課題解決できる協働性、目標を最後までやり抜く粘り強さ、そして未知の課題に挑戦する創造的思考を育むことが不可欠です。これらは総称して非認知能力とも呼ばれ、子どもたちが未来の社会で自ら価値を生み出す力そのものです。教育改革は、この力を体系的に育むカリキュラム設計と学習環境の整備に直結しています。

キーワード：非認知能力、レジリエンス、適応力、創造的思考、未来型スキル

ウ 教職員の専門性と教育イノベーション

教育改革は、教職員の挑戦なくしては成立しません。教職員自身が創造的に授業や学習活動をデザインし、教育イノベーションを推進することが、子どもたちの学びの質を決定します。自己成長を続けるプロフェッショナルとしての教育者は、非認知能力や主体的学びを実践的に支え、令和の教育にふさわしい学びを未来に創造していくことが求められています。

キーワード：教育イノベーション、プロフェッショナリズム、自己成長、創造的教育